

「実人生」という文脈 谷岡亜紀

藤島秀憲と加藤治郎は一歳違いの同世代だが、その経歴や作品は実に対照的である。そこから「現代短歌」の多様性が見えてくる。最新歌集『ミステリー』と『混乱のひかり』を取り上げる。引き出せば二百枚目のティッシュかな死ぬことがまだ残されている。

藤島秀憲『ミステリー』

・〈蒸発〉という二文字を折々に思いつつこの夏をしのぎつ

・医学生が父の解剖する午後をチラシ配りに歩くわたしは

母の死後、チラシ配りのアルバイトをしつつ、作者は認知症となった父の世話に疲労し困惑する。この父はかつて酒乱であり、そしてクリスマスチャンだった。安いティッシュで涙を拭う日々、作者は死、または蒸発をしきりに考える。そして父が死んだ。一人となった作者は、父母と暮らした家売ってアパートに移り、歌集を出して注目され、賞を受け、そしてまた月日は流れた。

・むかしむかし父と母いてわれのいて笑う声なく暮らしていたり
あの日々は「むかしむかし」となった。作者は一度失った「家族」を、歌に書きとどめることによって再び取り戻すのである。そしていま、さらに新しい「家庭」を作ることになった。

・わがのぼる脚立をおさえいる妻よ 届けを出して二ヶ月経ちぬ
箸置きのある生活に戻りたり朝のひかりが浅漬けに差す

・この先のことは手相見しか知らず一年契約して捺す判子
先のことは手相見しか判らないにしても、いま作者の食卓には

穏やかな朝の光が差している。藤島君、生きていて本当によかった。これは、私小説を方法として選択した、一つの達成である。

・パンケーキに十字を刻むナイフから伝わるなにか斬るやわらかさ
加藤治郎『混乱のひかり』

・ニューヨークリアウエボンと言うなめらかに氷の塔の輝く彼方

一方、加藤の世界をよく示すのはこのような作品である。二首ともに、比喩性、特に暗喩（メタファー）が核となっている。一首目ではパンケーキがブルジョワ文明の手触りを体現しつつ人体の比喩ともなり、十字が宗教的儀式を、ナイフがその敵かな暴力性を、それぞれ暗示する。二首目では上句の核兵器に対して、下句の「氷の塔」の輝きが〈像的な喩〉として暗示的に機能する。

・さくらばな陽に凍りつく広場には少年兵のすらりと並ぶ

・晩秋の渚のようにゆるやかな曲線のさき息づくものは
これらでは現実そのものではなく、その寓意化されたイメージが、一首全体を通して造形されている。比喩性に基づくイメージの造形。それは「前衛短歌」の方法の核となるものだった。それを踏襲しつつ、さらに「現代短歌」の実りからの大きな意味での「本歌取り」が加藤作品のベースにある。いわば〈知〉による現代短歌の継承である。岡井隆的なナンセンスや言葉遊び、さらには「口語」「風俗」の混入も、その一端と捉えられる。加藤の「口語」は自然な話し言葉ではない。それはデビューから一貫して、ポップカルチャーを志向した「セリフ体」である。加藤は後書で「現代短歌におけるライト・ヴァース」の定義として、機知、レトリック、風俗、口語とともに「私の苦を負わない歌」を挙げている。が、加藤のイメージする「現代短歌」のみが私たちの「現代」ではないことだけは、しっかりと押さえておく必要がある。